
編集後記

2016 年の『Clinical Anatomy 29』に、大腿四頭筋の外側広筋と中間広筋の間に新しい「筋」が発見されたという報告が載った。形状が「ネズミ＝mus」に類似していることから“muscle”と名付けられた西洋医学における「筋（muscle）」に関する研究は、現在も発展し続けているようである。

では、東洋医学における「筋」はどうであろう。

日本において“muscle”に対する訳語が「筋」と定められるのは、1774 年に記された『解体新書』による。

China では、1851 年に編纂された『全体新論』における“muscle”に対する訳語は、「肉」、「動肉」、「肌」、「肌肉」であり、1881 年に刊行された『全体闡微』から「肌」となり現在に至る。興味深いことにこれらの書物（全体新論・全体闡微）には「脳気筋」、「脳筋」、「気筋」、「筋」の記載があり、「筋」は“nerve”の訳語である。

“nerve”の訳語は『解体新書』で「神経」と定められ、それが China に伝わるのは 1908 年に丁福保の編纂した『新内経』の刊行による。

東洋医学における「筋」は、現在の「筋（muscle）」とは異なり、muscle, nerve, tendon, ligament を包括した概念であったと考えられる。したがって古典における「経筋」の治療は、そのことを理解した上で現在の知識に即した形で発展させる必要があると考えるが、各務文献が 1810 年に東洋医学における当時の「筋」の概念に異論を唱えてから約 200 年たった現在、当研究会以外ではその兆しすら見えない。

無礼を承知で申し上げますので、反論がありましたら、是非とも論文にしてご投稿下さい。

平成 28 年 11 月 29 日

日本東洋醫學研究會会長 松本和久

日本東洋醫學研究會誌 2016 vol.2

編集・発行	日本東洋醫學研究會誌 編集委員会
発行日	平成 28 年 12 月 23 日
発行者	日本東洋醫學研究會
